☆被災地の歴史資料・文化財の保全、震災の経験の記録化と保存!!
★幅広いﾈｯﾄﾜｰｸづくりを通じて、歴史・文化を復興に活かす!!
☆被災地から全国へ、歴史学と社会をめぐる普遍的な課題へ!!

史料ネット News Letter

第６６号　２０１１年5月２７日（金）
発行：歴史資料ネットワーク

▲宮城県石巻市のようす＝2011年５月15日、吉川圭太撮影

CONTENTS

● 巻頭言
東日本大震災をどう受け止めるのか ---------- 奥 村　弘(2)
● 速報 歴史学研究会大会で「東日本大震災に関する緊急集会」開催 ---------- (3)
● 宮城を訪れて――現地レポート―― ---------- 吉川 圭太 (4)
● 「裏打ちワークショップ」の記録
――歴史資料の「町医者」になる―― ---------- 平田 雅一 (8)
● 「裏打ちワークショップ」参加記 ---------- (9)
● 2011年度歴史資料ネットワーク総会・シンポジウムのお知らせ ---------- (11)
● 2011年東日本大震災被災史料活動支援募金ご協力の御礼 ---------- (12)

✐巻頭言

東日本大震災をどう受け止めるのか

奥村　弘

３月１１日、大震災発生時、私は、篠山で新たに見つかった庄屋文書の保全活動中でした。まったく揺れは感じず、テレビを見ていた史料所蔵者から、大変なことがおこっていると聞かされてはじめて大きな地震が東北で起こっていることを知りました。津波警報を伝えるラジオを車中で聞きながら、なんともいえない気持ちで大学に帰って､緊急の体制を取ることを関係者の皆さんに伝えました。それから三ヶ月になろうとしています。

大地震が来たとき、率直にいって、私自身は、申し訳ない思いと悔しい思いに駆られました。申し訳ないと思ったのは、大地震発生の直前、研究会等で、神戸の人は地震にこだわりすぎると言われたことがあり、それに説得的に対応せず、すこし怯んでしまったことがあったからです。

これまでも大きな地震は来たし、これからも来る。大規模な自然災害は、日本列島に生きてきた人々の歴史と現在に大きな影響を与えつづけるものである。歴史文化を担う私たち歴史関係者もこのような日本社会の中で独自の責務がある。私自身このことを何度も繰り返し、社会に訴えてきたつもりですが、そのことの深さを自分自身が充分につかめていなかったのではないのか、説得的に語る力が弱かったのではないのかという想いが今もよぎります。

実は、宮城をはじめ各地の史料ネットに参加した歴史関係者等と共同して、将来起こるであろう大地震に対する提言を５月ごろまでに纏め、具体的な提案を社会的に提示していく予定にしていました。地震直前にはそのための研究会も開催したところでした。それが出来ないうちに大地震がやってきたことは、私にとって、いい知れない悔しさを抱かすものでした。

大震災後の津波や、阪神・淡路大震災と二重写しになるがれきの街の映像を、見たくないと思いながら見てしまう毎日がつづき、史料ネットへの応急対策については、それなりに対応しえたものの、今回の大震災を全体として受け止め、考えて、新たな展開を考えて行くということは、なかなかできませんでした。

そのような私を勇気づけてくれたのは、被災地と連絡を取りながら、支援を進めるために粘り強く動いている史料ネットの若手であり、被災地で様々な困難があるにも関わらず早くから活動をはじめた宮城や福島のネットの皆さん、それを支える山形の皆さん、なんとか保全活動を進めようとがんばっている千葉や茨城の皆さんでした。また史料ネットには現在六百万円もの多額のカンパが寄せられていますが、カンパをいただいた方々の被災地への強い思いにも励まされました。４月には、東京の歴史学研究会の事務所で、これまでになかった規模の歴史関係の学会や団体の支援のための会合も行われ、歴史学研究会大会当日の昼休み集会で被災地での史料保全の動きが次々に報告され、その輪が拡大していることにも励まされました。

先日の昼休み集会を主催していて、阪神・淡路以来 16 年を経て、自然災害時の歴史資料保全は、災害時の緊急活動として社会の中に定着しつつあること、活動として不十分な

点は多々あるとはいえ、そのような動きを創っていく上で、歴史資料ネットワークがはたしてきたことについて、私たちは誇りをもってもいいのではないかと感じました。

阪神・淡路大震災の経験からして、津波についての歴史資料保全はこの夏までの緊急対応が重要であるように思います。その一方で、家屋解体に伴う保全活動は、これから始まります。被害が少ない地域からはじまり、被害が大きな地域や、新たな余震による解体はそれよりすこし遅くなることが予想されます。したがって被害が少ない地域での緊急の活動も重要であり、地震の報道がされない北関東での活動も求められると考えられます。

さらに地震災害から社会が立ち直るためには、長い月日が必要です。今回のように広範な地域で余震が続き、原発問題がある中では、阪神・淡路以上に長く、すくなくとも 20 年程度の規模で考える必要があります。また地震災害は、激震地とそうでない被災地でその様相が大きく異なります。その復旧もまだら模様となり、立て直しのスピードの格差も拡大していくことが予想されます。多様な被災地の状況に対応して、持続的に歴史文化についての支援を進めていくことも求められています。

そして長期の支援活動は、被災を受けなかった地域から被災地に対する一方的なものではないと考えます。歴史資料ネットワークは、これまでも宮城資料ネットの地震災害での活動から多くのことを学ばさせていただいていますが、長期にわたる支援とは、被災しなかった地域も含めて、災害に強い豊かな歴史文化を、日本社会において、いかに創るのかという課題を具体化していくことでもあるように思うからです。

会員、サポーターの皆様には、今後も様々な活動への参加や、財政的な支援のほど、よろしくお願いいたします。

（おくむら・ひろし／歴史資料ネットワーク代表）

速報　歴史学研究会大会で「東日本大震災に関する緊急集会」開催

5 月 22 日（日）、青山学院大学で開催された歴史学研究会大会 2 日目昼休みに、「東日本大震災に関する緊急集会」が開催された。

本集会は、史料ネットが歴史学研究会事務局より企画を依頼され、現在被災地各地で展開されている被災史料保全活動の現状共有の場とするべく、宮城資料ネットの佐藤大介氏、ふくしま史料ネットの阿部浩一氏、山形ネットの荒木志伸氏、長野県栄村での保全活動を行っている山村研究会の白水智氏より、各団体の活動の様子についてご報告いただいた。

▲東日本大震災に関する緊急集会のようす＝青山学院大学

報告後はフロアから活発な発言が相つぎ、各地の被害状況および 4 団体の他に行われている保全活動の紹介がなされた。今回の震災の広域性と、各地で行われている保全活動の活発さについて改めて感ぜられた。

また集会には全部で約 200 名以上の参加者が見られ、同時に開催された被災状況・保全活動の写真パネルや映像の展示と併せて、多くの方に保全活動の重要性を認識していただけたのではないかと思う。

（文責：川内淳史）

宮城を訪れて
――現地レポート――

吉川　圭太

5ヶ月ぶりに仙台を訪れた。昨年11月13日に仙台で行われたシンポジウム「歴史遺産を未来へ」に参加した時は、各地から集まった120名を超す人であふれ、資料保全や地域連携のあり方について活発な議論が交わされた。参加者それぞれが、歴史遺産・地域遺産への思いを強くしたシンポジウムだったことが思い出される。

それから約4ヶ月が経った2011年3月11日、ちょうど出先にいた私は、知人からの連絡で大震災の発生を知った。東北の実家や友人に電話をしてもつながらず、言い知れぬ不安を抱きながら、その夜、史料ネット緊急運営委員会のため神戸大に向かった。そこで目にした映像は、生まれ育ち、大学時代に親しんだ東北の地が変わり果てた姿だった。

大震災発生以降、史料ネットでは事務局体制を強化し、情報収集やカンパの呼びかけなどを続けてきた。被災地では各資料ネットが困難な中にありながらも、動き出していた。そうしたなか、私は、宮城歴史資料保全ネットワーク（以下、宮城資料ネット）に長年お世話になってきた関係もあり、4月13日から同事務局を訪れた。

神戸から仙台へ

大震災発生の翌日、宮城資料ネット事務局の一人と奇跡的に電話がつながった。ライフライン・情報網が寸断され、事務局メンバーも被災者となっていた。事務局が入っていた東北大学東北アジア研究センターは大きく破損し、立入禁止だという。一日にわずかな時間だけ立ち入りが許され、余震の続く中、データや器材などをメンバーが運び出しているとのことだった。事務局の4人が無事であることを知り安堵し、早々に電話を切った。

その後、仙台の大学時代の知人と徐々に安否の連絡が取れていく中で、被災地の切実な訴えを聞いた。報道ではほとんど触れられなかったが、仙台市内でも水・食料・ガソリンが不足し、「寒さ」と「飢え」におびえる生活が続いていると知った。後に聞いた話では、宮城資料ネット事務局員3名も一時、大学の駐車場で車中泊を余儀なくされていた。3月の仙台はまだまだ寒い。焚き火をし、持ち寄った食材で空腹をごまかし、狭い車中で夜を明かしたという。

▲車中泊を余儀なくされた宮城資料ネット事務局員＝宮城資料ネット提供

そうしたなか、震災発生から4日後の3月15日、宮城資料ネット・ニュース94号が配信された。このニュースを受け取った誰もが、被災地の厳しい状況を想い、そして宮城資料ネットの不屈さに勇気づけられたことだろう。

以後、宮城からのニュースが続々と配信され、ガソリンが枯渇する中での事務局の活動が切迫感とともに綴られていた。

4 月に入り、仙台市内のライフライン復旧やガソリン供給も進み、宮城資料ネットでは 4 月 4 日以降、沿岸部をはじめとする被災調査とレスキューをはじめていた（宮城資料ネット・ニュース 100 号）。ライフラインの回復が進み、現地の活動も本格化したということで、私は史料ネットから宮城へ派遣されることとなった。

4 月 13 日、午前中に山形空港に到着した私は、バスで仙台へと向かった。バスに乗り込んで間もなく、乗客の携帯電話から一斉にブザーが鳴った。緊急地震速報だった。強い揺れは起きなかったが、被災地に着いたことを強く実感することになった。国道 48 号線で仙台に向かい、作並の山道を抜けると、屋根にブルーシートをかけている家屋が車窓から散見された。

仙台市中心部は、人通り、交通量ともに多く、街行く人たちの様子も日常に戻っているようだった。だが、立ち寄ったコンビニは、飲み物やカップ麺などが品薄状態。店も開き出し、物資も手に入るようになってきたと事前に聞いていたが、4 月 7 日の大きな余震で再び品薄になったとのこと。仙台市中心部は日常と非日常の生活が複雑に折り重なっている印象を受けた。仙台駅の西口全面が復旧工事用の防塵・防音ネットで覆われている「異様さ」や、街の所々でビルのガラスが破損し立入禁止のテープが張られていたことからも、それは伝わってきた。事務局へ行く途中に通り過ぎた仙台城隅櫓や石垣などは崩落するなどの大きな被害を受けており、仙台城へつながる道路は通行止めだった。

▲仙台城隅櫓と通行止めの道路

宮城資料ネット事務局メンバーとの再会

▲宮城資料ネット臨時事務局

正午頃、東北大学の宮城資料ネット事務局へ到着した。東北アジア研究センターが使用不能のため、隣の建物に臨時事務局が設置されていた。臨時事務局が入居している建物は、東北アジア研究センターと同じキャンパス内に隣接しているにもかかわらず、無傷だった。地震被害がまだらであることが如実に表れていた。

臨時事務局にたどり着き、私は 5 ヶ月ぶりに理事長の平川さん、事務局の佐藤さん、蝦名さん、天野さんと再会した。部屋の中に

所狭しと積まれた資材や、レスキューして一時保管中の古文書やフスマ、パソコンモニターや書類で埋められたデスク、びっしりとスケジュールが書き込まれたホワイトボードから事務局の多忙さがひしひしと伝わってきた。

事務局員の３人は、平川理事長宅に身を寄せ、１ヶ月に及ぶ避難生活を続けていると聞いていた。連日休みなしの事務局対応で疲労もピークのはずだったろうが、普段通り迎えてくれた宮城資料ネットの方々の顔を見て、私自身張り詰めていた気分が安らいだ。

私が宮城資料ネット事務局に滞在している間に実感したことがある。多忙をきわめる事務局作業の中では、ふと口にする甘い物が心を和らげてくれた。些細なことに思えるかもしれないが、大きなことだ。そして、そうしたものを送ってくれたり差し入れに来てくれる人がいる。遠方からレスキュー資材やガソリンを運んできてくれた人がいる。そうした多くの人たちの支えとともに、被災地での資料保全の活動が続けられていると実感した。

岩沼市の被害状況調査

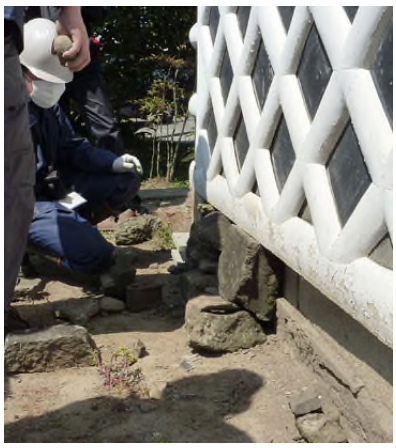
▲岩沼被害調査出発前、建築士らとの打ち合わせ

４月 14 日は宮城県岩沼市の被害状況調査に同行した。宮城県の南東に位置する岩沼市は、沿岸部が津波で大きな被害を受けたが、今回の調査は市内内陸部の地震被害調査であった（宮城資料ネット・ニュース 105 号参照）。

今回の宮城資料ネットの活動では、建築士チームと連携していることが新たな取り組みであった。支援に駆けつけた一級建築士や古建築の専門家と連携し、建物の調査診断と歴史資料の調査・保全を同時に行うという画期的なものである。

地震被害で土蔵などの土壁が落ちてしまうと、所有者が蔵の解体に走る場合が多いとのことであった。そうした事態に対し、「土蔵は土壁が落ちても、筋がしっかりしていれば修復が可能である」という建築士の診断と専門的見地からの助言は、何より訪問先の方が安心されるし、同行する調査員にとっても心強いものだった。

また、建物の応急処置が必要な場合は、建築士の指導でその場で処置もする。その日も、調査に伺ったお宅で、土蔵の剥離した壁土の下にブロックを埋めて補強したり、土壁崩落部分をブルーシートで覆う応急処置を施した。



▲土蔵の剥離した壁土をブロックで応急処置

ただ、代替わりや社会状況の変化などによって、蔵や

▲土蔵の崩落部分をブルーシートで応急処置

大きな母屋を維持管理できなくなっている現状がある。お伺いしたお宅でも、母屋が広いため７月頃まで暖房が必要で、またすぐ９月頃には寒くなるという切実な悩みがある一方、建物自体が宝であって代々引き継いでいきたいと述べられていたのが忘れられない。歴史的建造物の修復・維持は、個人レベルではとうてい費用をまかないきれず、所有者にとってその修復・維持が大きな負担となっている現実があることを痛感した。

今回、宮城県の内陸部を調査して、地震被害も大きいことを確認した。壊滅的な津波被害がクローズアップされているが、内陸部は 2008 年の岩手・宮城内陸地震による被害に重ねて今回の大地震に襲われている。近年のたび重なる大地震や今なお続く余震によって、物的に相当大きな被害が出ているとともに、被災された方々の精神面への影響も大きいと思われる。

私たちは、壊滅的な部分を切り出しがちな震災報道を見ると、あたかもそれが被災地の全てであるかのようなイメージを抱いてしまう。しかし、被災地の状況は一様ではない。地震被害はモザイク状に現れるし、津波被害をとってみても、地域によって被害の現れ方は異なる。地震や津波は自然現象であっても、災害は社会現象であり、地域の成り立ちやそこに暮らしてきた人たちの生活・生産のあり方に大きく関係している。これからの地域の再生・復興には、必ずその地域に生きてきた人びとの記憶や歴史が必要になるはずだ。地域の復興と地域資料の保全は一体のものである。その取り組みは今後何十年という長いものになるだろう。

そして、被災地の状況は日々刻々と変化していっている。被災地の「外」にいる私たちは、冷静に被災地の現状をつかみ、想像力を働かせ、弛まない支援を続けていかなければならない。現地を訪れて、私はそうした思いを強くした。

最後に

津波によって全て流された地域で、住民が自分の家だったに違いない木材や看板を拾い出している映像を見た人もいるだろう。地域そのものが消失し、資料と呼べるものは有るか無いかという状況の中、そうしたガレキの一片であっても、それはその土地に生きてきた人の証しなのであり、今を生きる縁なのである。そうして人々が残したものこそが、やがて歴史遺産になっていく。

失われてしまった地域の記憶を刻みとどめ、残された歴史資料やまさに今生み出されてきている震災の記録をどう受け継ぎ、いかに未来につないでいくか。それは関西にいる私たちにとっても大きな課題であり、阪神・淡路大震災 16 年の経験を踏まえ、一人ひとりが真剣に考えていかなければならないだろう。

（よしかわ・けいた／歴史資料ネットワーク運営委員）

「裏打ちワークショップ」の記録
――歴史資料の「町医者」になる――

株式会社工房レストア　平田　雅一

2010年6月29日(火)午前10時半から神戸大学文学部古文書室にて「裏打ちワークショップ」をおこないました。当日は、史料ネットメンバーの他、NPO法人「書物の歴史と保存修復に関する研究会」のメンバーの方や大学図書館の職員さんにもお越しいただき、計15名の参加となりました。

今回処置した史料は、昨年の台風9号で被災したお宅からレスキューした賞状と虫損のある刊本のサンプルです。賞状自体は被災史料ではありませんが、酸性劣化によって紙がボロボロになり、ばらけてしまっているので裏打ちをして所蔵者にお返しすることにしました。

このワークショップは、(株)工房レストアさんのご協力により開催することができました。

技術指導をしていただいた、平田雅一社長に改めてお礼申し上げます。

(松下正和／歴史資料ネットワーク副代表)

はじめまして、紙資料の修復を主に行っております株式会社工房レストアと申します。

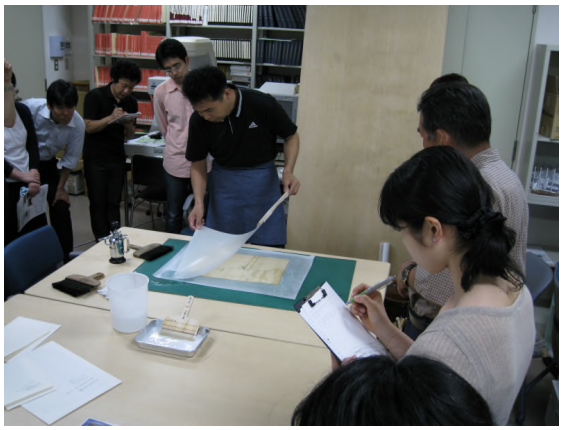
私共は伝統の技術を継承・尊重しながら、作業の効率化・スピードアップ・低コスト化を進める為に新しい技術を開発し、より多くの方に喜んで頂けるよう努力しております。

以前より歴史資料ネットワークの松下正和先生とご縁があり、何度かお話をさせて頂く中で皆様の活動方針と弊社の経営方針に近い部分があると感じておりました。

「町医者的存在となる」

皆様もご存知のように国宝や重文指定文化財などの修復・保管はしっかりとした受け皿があり、設備・環境なども整備されています。いわば文化的資料の「大病院」が存在するのです。

一方で文化的資料全体を見渡した時には、そのように保護された指定文化財はごく一部に限られその他の膨大な数の資料は放置されたままの状態に置かれています。特に災害などにより被災した資料などはすぐにでも廃棄されてしまう危険性を持っております。



▲平田社長によるデモンストレーション

しかし、地域の方々・個人の方々にとっては、指定文化財よりも大切で貴重となるそのような資料に目を向け廃棄消滅の危機から救うべく歴史資料ネットワークの方々はボランティアとして保存活動を続けられています。

私共レストアも同じような考えで、「大病院」ではカバーできない資料の修復において、間口を開き細かく素早い対応ができる「町医者」的存在でありたいと願いながら、日々仕事に取り組んでおります。

そして各地でのボランティア活動を展開されている歴史資料ネットワーク様に何かお役に立てることはないかと思っていた所、松下先生より資料の裏打ちについてワークショップを行いたいというご相談を受け、お手伝いをさせて頂くこととなりました。

6月29日の開催当日は、予定時間よりもかなり早くから参加者の方々集まって来られ、皆さんの資料保存に対する熱意を感じました。

ワークショップ冒頭には、松下先生より日頃の歴史資料ネットワーク様の活動についてご説明を戴きました。

続いての実習を私共が担当させて頂き、まずはデモンストレーションとして用意された賞状を裏打ちしてみました。この賞状はすでに脱酸処理等は施されているということでしたので、滲み止めなどの前処理はこの場では省き作業を開始しました。

作業台の上にレーヨン紙を敷き、その上で破れてバラバラになった賞状のピースを組み合わせていきました。資料に適度な湿りを与え、平坦に押さえ込んでいきながら、その際にレーヨン紙を活用し資料を扱いやすくすることなどをお伝えしました。

次に少し大きめにカットした和紙に糊をひき、その和紙を賞状に裏打ちしていきました。ここでは糊の準備・和紙へのひき方・刷毛の使い方などについてお話しさせて頂きました。

そして、裏打ちした賞状は乾燥して平滑にする為、張り板に仮張りしました。

以上のデモンストレーションを踏まえ、参加者の方々にも実際に裏打ちの作業をして頂きました。皆さん、糊のひき方・量、また刷毛の使い方・手の使い方に少し戸惑われたようでしたが最後には綺麗に資料を伸ばして仮張りまで行えていました。

短い時間ではありましたが皆様からの質問などを受けてご説明しながら改めてこちらも再確認することもあり勉強をさせて頂きました。

この度の私共からの裏打ち作業の説明は、基本を抑えつつなるべく身近な道具・環境を利用して作業ができるように工夫したつもりです。作業対象となる資料はそれぞれにことなりますので当然対処方法や使用する材料なども違うものになります。そのような意味におきましてはこの度のご説明だけでは十分なものではありませんでしたが、少しでもお役に立ちましたら幸いです。

最後になりましたが今回歴史資料ネットワーク様のお陰で皆様とこのようにご縁を頂き大変感謝しております。今後は被災現場での応急処置・保存活動またはワークショップなどを通じてより多くの歴史資料を後世に残すお手伝いをしていきたいと思っております。

（かぶしきがいしゃ・こうぼう・れすとあ ひらた・まさかず／株式会社工房レストア社長）

「裏打ちワークショップ」参加記

■裏打ちについての一般知識は少しありました。今回、プロの技を近くで見ることができ、充実した時間でした。ケースバイケースということを再認識し、忘れないようにしたいと思います。

（上村浩美・かみむらひろみ／NPO 法人書物の歴史と保存修復に関する研究会）

■今回のワークショップは、現に目の前で劣化しつつある資料をいかに保護するかという現在の関心にちょうど合うもので、参考になりました。伝統的な手段や材料にこだわらなくても、比較的安価で入手しやすい材料でも(やり方次第では)充分な補修は行えるというのは非常に心強いです。

(岡田逸太・おかだはやた／神戸大学附属図書館)

▲参加者による体験作業のようす

■裏打ちというと、専門の用具が必要で、難しいイメージがありますが、講師の方が、身近にあるものを代用する方法を案内してくださったので、その点は良かったと思います。しかしながら、私は全くの素人(他の方は修復などの経験があるようでしたが)なので、まだまだ用具もやり方もハードルが高いです。実際には、もっと練習してからでないと、文書の補修をするには不安もありますし、難しいと思います。そういう意味で、WS がもっと開催されればいいのではないかと思いますし、今回のようなバラバラになった文書類でも修復が可能であるということが、(たとえ専門家に任せたとしても)周知されることは、文書保全の点で有効だと思います。

(関山麻衣子・せきやままいこ／神戸女子大学大学院(研究生))

■職人さんの手さばきは鮮やかで流石でした。水分の調節や手の動きなどの細かいコツも教えて頂き大変勉強になりました。本に書かれている通り一遍ではなく、色々なやり方があり、資料の状態によって使い分けることが勉強になりました。古糊の話、糊の濃さの調整も大切で為になるお話でした。糊の濃さなどはやはり実物をみるのが一番、わかりますね。全員が裏打ちするには、場所と道具が足りなかった様に思います。

メインは裏打ちですが水害のお話や後半の助手の方が指導している間のお話も興味深く、ゆっくりお伺いしたく思いました。このような企画が、またありましたら参加したいと思います。土日に開かれますと都合がつきやすくなる方も多いと思います。

(M・Z)

■初心者には敷居の高い裏打ち完成までのプロセスが、”自分にもすぐに出来るのでは”と思える程に平田様の判りやすい説明と、軽やかに見える熟練の技を間近で拝見できたことは、修理を学んでいる私にとって大変参考になりました。

見近にある道具を一部活用すること、使用する糊も修理対象によっては現代的な糊を使ってみることなどが提案され、裏打ちへのイメージが緩和されたのではないかと思います。中でも、ぼろぼろになった資料のピースの位置合わせという、かなりの集中力と緊張感が伴うシーンに立ち合えたことが貴重な体験となりました。

個人的な希望として、冷凍保管された後の史料の状態や修復プロセスが一部でも見ることが出来ればと思いました。

(木村美知子・きむらみちこ／NPO 法人書物の歴史と保存修復に関する研究会(受講生))

■今回行った、賞状のような厚手の紙による裏打ちは、ある意味貴重な経験だと感じました。被災した一般の方々が持つ資料は様々ですし、それを修復なり処置をする際に、特別な道具ではなく、普通に買える商品でできるということ、こだわりなく使用することも可能ということを教えていただいてためになりました。

(梶野妙子・かじのたえこ)

2011 年度　歴史資料ネットワーク総会シンポジウム

東日本大震災　関西で何ができるのか？

― 阪神・淡路大震災 16 年の経験をふまえて ―

2011 年 3 月 11 日の東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）により、岩手・宮城・福島・茨城など多くの地域で甚大な被害が発生しました。今回の地震は、被災地が遠隔地であり、また被害が広範囲に及び、現在もなお余震が続いています。私たちは、こうした状況下で、どのような支援活動を行うべきかについて、地震発生直後から協議を重ねてまいりました。これまで関西での16 年の活動経験を踏まえて、歴史資料ネットワークは何ができるのか、皆さまとともに考える場にしたいと思います。

資料保全活動のいま

- 川内　淳史　　被災資料保全活動の状況と史料ネットの取り組み
- 吉川　圭太　　現地活動レポート

これからの資料保全に向けて

- 板垣　貴志　　震災資料の収集・保存をめぐって
- 人見佐知子　　震災体験を聴く
- 添田　　仁　　［緊急研究レポート］西摂地域を襲った地震・津波の記録

①

②

① 津波被害を受けた宮城県名取市の農業高校の資料レスキュー（史料ネット撮影）
② 東北芸術工科大学の学生による被災資料のクリーニング作業（史料ネット撮影）
③ 宮城県石巻市で津波に耐えた土蔵（宮城歴史資料保全ネットワーク撮影）

③

日時　2011年 6 月 12 日（日）　13:30 ～ 17:00

会場　西宮市大学交流センター
西宮市北口町 1 番 2 号　ACTA 西宮東館 6 階
アクセス：阪急神戸線　西宮北口駅より北東へ徒歩 2 分

参加費 / 無　料

2011 年東日本大震災被災史料救出活動支援募金ご協力の御礼

支援者一覧（敬称略・順不同・4 月 7 日～4 月 30 日現在。のべ 133 名、7 団体）

松尾寿、浅倉直美、杉仁、田中裕子、加藤厚子、大谷正、長谷川伸三、白鳥久志、岸清俊、浜口誠至、梅田千尋、阿蘇竜太、須磨千頴、アカエユウイチ、ワタナベヨシロウ、大石三紗子、川合悦子、籾木郁朗、内藤一成、服藤早苗、佐藤孝之、浜田久美子、市澤哲、大国正美、浦畑奈津子、橋本政良、宇山孝人、辻雅博、谷本雅之、今野慶信、八木隆雄、小野塚航一、薗部寿樹、井田寿邦、金山浩司、三重県生活・文化部新博物館整備推進室三重県立博物館職員一同、佐々木隆爾、八尾嘉男、須田牧子、藤原重雄、下向井龍彦、本井優太郎、岡本満正、金子久美子、中島延佳、下川雅弘、大谷正、教育史学会、四家久央、桂川光正、本川幹男、山上豊、佐賀朝、池上裕子、米崎清実、小西瑞恵、牧原憲夫、日比佳代子・秋山晋吾、村上岳、島田克彦、胡光、髙橋昌明、大山喬平、茨城大学人文学部歴史・文化遺産コース（主任：高橋修）、宮崎県埋蔵文化財センター所長森隆茂（担当：永友）、細野昌彦、佐藤純子、鳥谷智文、三宅俊隆、松本信夫、野村君代、昆野伸幸、妻鹿広夢、児玉兼輝、市橋なな子、後藤彰信、大隅清陽、野田泰三、宮本裕次、山田修士、田村葉子、相曽貴志、えひめ記録史料を守る会、井ヶ田良治、樋上恵美子、保立道久、今尾文昭、NPO 法人 としき遺跡調査会、柏木朱実、高橋浩明、熊谷祐信、藤井正太、上杉和彦、井原裕司、栄原永遠男、REICHERT.RUTH（ライヒェルト・ルート）、谷口裕信、玉置修、奥村弘、吉原大志、加藤慶一郎、原和子、砂子了一、北泊謙太郎、熊谷光子、菅野則子、静岡県近代史研究会、久保田裕次、長町顕、竹内智宏、西野悠紀子、松本望、八木田裕子、早川万平、原田正俊、岡崎悦明、上野輝将、松尾信裕、三澤純、梅村喬、梶山雅史、青柳周一、上村浩美（NPO 法人書物研究会）、濱田延充、南尊融、大藤修、廣木尚、筒井裕美子、和島恭仁雄、長井伸仁、山中浩之、佐々木倫朗、根本隆一、大西愛、佐々木和子、古山悟由、江草宣友、西村慎太郎、麻田茂、土佐山内家宝物資料館

※ 岩田書院・岩田博様の「歴史系の専門書の出版社としては、現地での史料保存に役立ててほしい」とのご厚意により、2011 年中の岩田書院の学会・研究会での売上金の 1 割を、被災史料保全への支援募金としてご寄付いただけることになりました。
今年度第一弾としてすでにご入金いただきました。ありがとうございます。

※ 特種紙商事（株）の神谷修治様のご厚意によりペーパータオルをご提供いただきました。なお、各資（史）料ネットへの発送には NPO 法人文化財保存支援機構（JCP）様にご協力賜りました。ありがとうございます。

※ 4 月 23～24 日、考古学研究会総会（於岡山大学）にてカンパへのご協力をいただきました。カンパしていただいた方々、ありがとうございます。

史料ネット　NEWS　LETTER　No.66　2011 年5月27日発行
編集・発行　　歴史資料ネットワーク
〒657-8501　神戸市灘区六甲台町 1-1　神戸大学文学部内　史料ネット
TEL&FAX:078-803-5565（開室時間　平日の午後1時～5時）
e-mail:s-net@lit.kobe-u.ac.jp
被災史料救出活動のようす・詳細は日々ブログに更新しています。
http://blogs.yahoo.co.jp/siryo_net